

神は『世界』と『命』と『可能性』を創った。
広がる世界には、様々な命が芽吹き、咲き乱れる。
力と知恵の可能性を与えられた種族は互いに競争し生きている。

力を与えられた者達は、大きな魔力を。
知恵を与えられた者達は、大きな社会を。
競争し、共存し、生まれ、死んでいく。
雄大な歴史の大河の中でそれは繰り返し続いていく。

その世界のある場所で、新たな物語が始まろうとしていた。

エオイア王国

大陸中部に位置した国家である。
交易により発展し、魔物が少なく、一年を通して温暖な気候が続く。
周囲の国家との関係も良好で、平和と平穏が約束された国である。
兵士たちはじつくりと訓練を重ね、石造りの城壁に守られて人々が暮らす。
安定した情勢から教育機関、研究機関が発達し他国からの交流学生も多い。
そんな王都の一角、木で出来た小さな家の中。
そこから物語は始まる。

暗い森の中を走る。
足は小枝や草により切り傷まみれになっている。
心臓は早鐘を打ち、荒い呼吸が音を立てる。
首から下げた魔宝石が少年の胸元を叩く。
右手には、少年には大きすぎる銃を。
左手には、小さな少女の手を握る。
「大丈夫だからな！ お兄ちゃんが絶対守ってやるからな！」
震える涙声で少女に声をかける。
「おにいちゃん……こわいよおお」
「頑張れセレン！ 絶対に守ってやるから！」
励ましながら、二人は森の中を駆けていく。
「おにいちゃん……………」
地響きと共に、二人の目の前に黒い巨人が立ちふさがった。
鈍い音を立てながら隆々とした筋肉が蠢き、爛々と光る三つの目が獲物を見つけた喜びに歪む。
「……そこで待ってろ。絶対にお兄ちゃんが守ってやるから！」
木陰に少女を押し込み、少年は銃を構えて敵へと走る。
「おにいちゃん！ おにいちゃん！！」

そして、光が――

「お兄ちゃん！」

「うう……ん？」

柔らかさに包まれる感触とやや強引に揺すられる感覚に少年が呻く。

「朝ご飯出来たよ！ それに郵便も来てるよ！」

聞きなれた声が少年の頭の中で反響する。

重い瞼をこじ開け、肩をつかむ腕のもとをたどると、少年よりさらに幼い少女の姿が見える。

品のいいブラウンチェックに統一された、ブレザーとスカートの装いの少女が尚も少年を揺する。

少女の細い金髪は肩あたりで切られ、白い首筋が露わになっていた。

大きな蒼い瞳を今は細め、眉間に皺を寄せているがそれも怖いと言うよりも可愛らしい。

体のラインは柔らかな曲線を描いているが、やや平均より細いようにも思われる。

「もう！ お兄ちゃん！ 朝ご飯冷めちゃうよ！」

(ああ……夢か。久しぶりだな……)

反応の薄い少年に痺れを切らしてか、少女が郵便物を少年の口の中に押し込んだ。

「ちょっとお兄ちゃん、聞いているの！？」

「うごお！」

さすがにたまらず少年が身を起こす。

口にねじ込まれた手紙を抜き取りながら、窓から差し込む朝日に目を細めた。

手紙の主の名は書いておらず、裏に『アルク・イロナカート宛』と書いてあるだけだ。

「ああ。おっさんか」

慣れ親しんだ相手からの手紙に少年、アルク・イロナカートは躊躇いなく封を切った。

(……なるほど。旨い仕事を持ってきてくれたってか)

手紙に目を通し、一人納得するアルクに、すでにテーブルに着いた少女から声がかかる。

「お兄ちゃん、早く！」

「分かったセレン。すぐに行く」

妹、セレン・イロナカートに返事をしアルクもテーブルへと着いた。

二人が席につくと、そろって挨拶をし朝食を食べ始める。

兄が 18 歳で、妹が 16 歳。自立するにはやや早い二人には親がいない。

十二年前に村が魔物に襲われた時に両親を亡くし、その後は二人で王都に暮らしていた。

部屋を見れば、やや質が劣ることを除けば、二人が生活していくのに困らないだけの家財はある。

国が支給したものもあれば、アルクが収入で買った物もある。

決して十分とは言えないがそれでもアルクは幸せを感じていた。

飾り気のない木のテーブルにはセレンが作った朝食が並んでいる。

「うん。旨い旨い。セレンは料理が上手いなあ」

トーストと目玉焼きだけの質素な朝食を詰め込みながらアルクが笑顔を漏らす。

「いや、これ料理っていえるの？」

同じくトーストを食べながらセレンがじっとりとした視線を送る。

「ごめんな。でも今日はギルドで仕事が入るから。ちゃんとしたご飯作るよ」

金銭面のことを言われたと感じたアルクが軽い口調で謝る。しかしその様子にセレンがやや慌てた様子を見せた。

「えっ、いや……そうじゃなくて……ごめんなさい」

「いーのいーの、お金なんて最低限あれば十分。それよりも学校で虐められたりしてないか？」

「なんで？」

「ほら、エオイア王立魔法学校っていったら超お金持ちの行くところだろ？ そんなところに俺たちみたいな貧乏もんが行ってさあ……なんか言われんのか？」

国の援助で生活に困ることはなかったが、アルクが普通学校を卒業した後はその援助も終わった。

それ以後は、生活費もセレンの学費もアルクの収入で賄っている。奨学金の支給もあるが、それでもエオイア王国最高学府の学費は重くのしかかっている。

「大丈夫。それにお兄ちゃんが折角入れてくれたんだし……その、頑張らないと申し訳ないっていうか……損っというか」

「気にすんなよ。俺はセレンが楽しく学校に行ってくれたらいいの。お金の事とか気にすんなって」

「うん……あ、ありがとう」

「で、学校は？ 今日行かないのか？」

「え？ 昨日言ったでしょ？ 今日から長期休暇だよ」

「ふーん。で、何故制服？」

「あっ……………」

顔を赤くしながらトーストをかじるセレン。

そんな妹をアルクは微笑ましく眺めていた。

朝食を終え、いつものスラックスに裾の長いジャケットという姿に身支度を整えた後、アルクがセレンに声をかけた。

「じゃあ、ギルドに行ってくるから。留守番よろしく」

「ちょっと待って！ 私も行く！」

その声とともに、慌ててセレンが立ち上がる。一度着替え直しすでに普段着となっているセレンは、ハーフパンツにシャツ、その上にピンクの薄いコートという格好となっている。

「え？ 来るの？」

「私も今月で16よ。ギルドに登録できるわ」

(そっか、今月で誕生日だったか……プレゼントとかどうしようか)

(ちょっとでもお兄ちゃんに楽しませてあげないと)

少しの間、互いの事を思う二人だったが、先にアルクが声を出した。

「いやでもなあ。せめて学校を卒業してから……」

「いいの！ 一人より二人組の方がいろんな仕事ができるでしょ？」

やる気に満ちたセレンの瞳にアルクがおされる。

(ほっといても勝手に何かをし出すかもしれない……)

行動的なセレンの性格を考え、アルクは折れることにした。

「……分かった。でもお兄ちゃんの言うことをちゃんと聞くんだぞ」

「はい」

人の多い通りを二人並んで歩く。

交易により発展したエオイアの街並みは明るい。

石畳の道路は綺麗に整備され、魔法灯が等間隔に立ち並ぶ。

通りに沿って並ぶ商店には日用品から工芸品まで様々な物品が並ぶ。

行き交う学生や研究者たちは自らの意見を路上で交換し、それは「学びの都市」ともいわれるエオイア王都の日常風景であった。

威勢のいい声が飛び交い、荷物を運ぶ馬車がせわしなく行き交う。軽装備の警備兵が商人と笑いながら会話する姿は、王都の平和を象徴するようであった。

大通りに面した一回り大きな赤煉瓦造りの建物の前で二人は立ち止まった。

「いいかあんまりお兄ちゃんから離れるなよ？」

心配を隠せないといったアルクに対して、セレンは呆れ顔で答える。

「もう、この年で迷子になんかならないって」

「いや、結構荒っぽい人とかいるからさあ」

「ふーん」

「さ、行くか」

厚いドアを開けると、賑やかな喧騒と酒の匂いが溢れ出す。

酒場も兼ねている店内は、飲食を楽しむ者や、壁に掛けられた依頼書を確認する者もいる。

テーブル席には料理や酒が並び、剣や槍を背負った者が談笑をしている。

店内を照らす赤い魔法灯によって、グラスの影が揺らめいている。

アウトローな雰囲気にもまれそうになり、セレンが半歩下がった。

「結構みなさん何というか……」

「荒くればっかりだろ？ 俺みたいな奴の方が珍しいんだよ」

各々が自慢の武器をそばに置いている中で、武器も持たず、体もそれほど大きくないアルクは異端であった。

しかしアルクは臆せず真っ直ぐと店の奥のカウンターへ進む。

「よおアルク！ 元気にやってるか？」

「家の魔法灯が壊れちゃってよ。今度直してくれねえか」

「後ろの誰？ メッチャカワイイじゃん」

すれ違う人の多くがアルクへ声をかける。

それらに適当な返事をしながら掲示板の前まで進んだ。

掲示板には様々な依頼書が並び、その内容は魔物の討伐や秘境の探索から逃げ出したペットの捜索まで様々だ。報酬を示す金額の桁数も様々である。

「いろんな依頼があるね」

「まあな。でもやっぱり討伐依頼とかが報酬もでかいんだ」

「ふーん」

ギルドには国の内外、事の如何を問わず様々な依頼が流れてくる。それらの依頼をこなし、その報酬でアルクは生計を立てている。

掲示板を横目に店の奥へと進む。するとカウンターの向こう側、一際大きな体格の男がアルクに声をかけた。

「おう！ アルク！ 今日彼女は一緒かい？」

髭を蓄えた口元をからかうように曲げる。

「違うよおっさん。セレンだよ」

カウンター席に座りながらアルクが改めてセレンを紹介する。

「これは、まあ……えれえ大きくなったなあ！」

アルクがおっさんと呼んだ男の名はレジアス。このギルドを取り仕切っている男だ。

生活の苦しいアルクに対し、実入りのいい仕事を優先的に斡旋する人情家な一面もある。

スキンヘッドでひげ面、しかしそれでいて威圧感を与えない笑顔を正面から受けながらセレンがゆっくと話す。

「こんにちは、レジアスおじさん。私も今日からこのメンバーになります」

精一杯の営業スマイルのセレンの言葉にレジアスが数秒止まり、次いで視線がアルクに向かう。

「うん？ アルク？」

「あー……うん。そうだった。登録よろしく」

アルクが投げやりに言うと、レジアスは大きな顔に満面の笑みを浮かべた。

「お、じゃあようやくパーティ結成ってか！」

レジアスの表情とは対照的にアルクは心配を隠せないといった様子で依頼を求める。

「そう。なんかセレンでも出来そうな依頼ない？ なるべく危なくないやつ」

「まあ待ってな。ともかく、セレンちゃんの能力を見せてもらおうぜ」

「はい。どうぞ……でもどうやって？」

「おっと、この魔法は学校じゃあ習わねえのか？ んじゃ、『ステイタス』ってな」

レジアスが魔力を込めた言葉を発するとセレンの前に光る文字列が並び出した。

それはいくつかの文字と数字に分かれ、セレンの周りを取り囲む。

「すごい、なんか出てきたよ」

セレンの能力が次々と表示され、レジアスがそれを紙に書き込んでいく。

「ふんふん。さすがに筋力はアルク以下だな。後は魔法関係に、運動神経、精神力もろもろを足してレベルを算出っと……」

「で、どう？」

「まあ待ってろって、ええとこれがこうなって……」

紙をのぞき込むアルクにセレンが声をかける。

「お兄ちゃんこれは？」

「ああ。ステイタスって言ってな、お前のレベルが分かる」

「へえ、でもどうして？」

「ギルドの仕事には荒っぽいものもあるからな。客観的に能力を把握するのが大切なんだ」

ギルドに舞い込む依頼は、魔道具の修理といった技術的な依頼から、魔物や魔族の討伐まで多岐にわたる。

もちろん危険度によって報酬は変わってくる。

庭掃除程度のものならば一日分の生活費程度で、危険な魔族の討伐となれば、金銭以外にも貴重な魔道具などが報酬となることもある。

「なるほど。で、お兄ちゃんは何レベルなの？」

「5だ。これでも荒事とかじゃない限りは十分」

無謀な依頼に挑戦させないようにギルドの人員はレベルによって管理される。基礎体力から戦闘経験までを詳細にデータ化して算出されるレベルは個人の能力の目安となる。

「そっか。お兄ちゃん、お仕事は魔道具の修理とかだもんね」

「まあ、危険が少ない割には儲けが多いからなあ……おっさん出来た？」

ペンが止まったレジアスにアルクが声をかける。しかしレジアスの視線は紙とセレンの周りの文字とを往復するだけだ。

「……あのよ、セレンちゃん。戦闘経験はあるのか？」

「いえ？」

何のこと、と言うようにセレンが首を傾げる。

「15だ」

紙に目を落としたままレジアスが呟くように言った。

「何が？」

「セレンちゃんのレベル。戦闘経験なしでこんなレベル見たことあねえぞ……」

『はい？』

アルクとセレンの声が重なった。

「特に魔法関連がえらいことになってる。すでにクラス表記が〈一般人〉じゃなくて〈魔法使い〉になってやがる」

「15……お兄ちゃんは何レベルだっけ？」

「……5です……一般人です」

単純に考えて三倍の差。

早くも崩壊した兄の尊厳にアルクががっくりとうなだれる。

「お兄ちゃん……元気出してよ。魔法関連が良いのはお兄ちゃんが学校に行かせてくれたからだし……」

戸惑いながらも慰めるセレンに対して、呟くような小さな声でアルクが応える。

「うん……そうだな。ありがと……セレンは優しい子だなあ……」

カウンターに突っ伏したままのアルクの背中を力強くたたき、レジアスが一枚の紙を提示した。

「ほら、元気出せよアルク。考え方によっちゃあもっと実入りの良い依頼を受けられるんだからよ。ほら、これとかどうだ？」

レジアスが取り出した依頼書にアルクとセレンが目を通す。

「ええと、場所は近くの村だな……依頼レベルは5～7。内容は魔物の討伐……」

読み上げるアルクにレジアスがカウンター越しに身を乗り出す。

「どうだ？ 内容はウルフの討伐、それで報酬は1500だ。今朝お前用に仕入れたやつより倍は実入りがあるぜ」にやりと笑うレジアスに対してアルクの表情は暗い。

「ウルフってたしかオオカミに似た魔物だよな？」

魔物についての知識をセレンが思い出す。

魔力を持つ動物を魔物というが、その中でもウルフは害獣扱い程度のものだ。

しかしたかが害獣、されど害獣。予想される危険にアルクは躊躇う。

「でもそんな危ない依頼をセレンにやらせるわけには、万一怪我でもしたら……あ」

『依頼レベル5～7』、ウルフは魔物と言ってもほぼ野生動物レベルの敵。レベル15のセレンにとっては余裕だ。セレンにとっては……

「……俺、結構ぎりぎりなんですけど」

一応アルクも適正レベル内ではあるが、特に戦闘に優れているわけでもない〈一般人〉であるアルクにとってはぎりぎりのラインにある。

「ほら、いざとなったらセレンちゃんに守ってもらえば良いじゃねえか」

「人が一番気にしたところをっ！」

立ち上がるアルクを無視し、レジアスはセレンの方を向く。

「セレンちゃん、兄貴をしっかりと支えてやれ。な？」

「はい！ 任せてください！」

気合十分といった様子のセレンに対し、アルクの表情は暗い。

「いやだ……帰りたい……」

「おう。帰ってしっかり用意してきな。アルクも討伐依頼は初めてだろ？」

「もうイヤだー！」

アルクの叫びは店の喧騒の中に消えていった。

「レジアスおじさん変わってなかったね」

家に帰り、袋に道具を詰め込みながらセレンが言う。

かつて二人が料理をするのもままならなかった頃、レジアスがよく食事を用意しては持ってきてくれたのだった。二人が料理を出来るようになった頃には、レジアスも来なくなったのだが、アルクはその後もギルド関連で世話になっていた。

「お前はずいぶん強くなった……」

机に突っ伏し、弱々しく言葉を発するアルク。

「まだ何にもしてないよ……」

傷薬や保存食を袋に詰め込むセレン。

「あ、そうだ。セレンは実戦経験はあるの？」

「ええと、命がけっていうのはないけど。学校で結構やってるよ」

「ほほお、じゃあ結構戦闘用魔法も出来るの？」

「あ、それじゃあ私の使える魔法を書いとくね。いざっていうときはお兄ちゃんも知ってた方がいいと思うし」

「ああそうだな。個人技能の共有はパーティの基本らしいからな」

ギルドに出入りするアルクの耳には依頼をこなす上であれこれ必要な情報が入ってくる。

(そうだ。俺がしっかりしてないと)

その情報を武器にすればいい、と自分に言い聞かせるアルクの前に、一枚の紙が差し出された。

「はい。私が使える魔法のリスト」

「お、おおう」

ざっと見た限り十種類以上。どれもアルクがどうあがいても使えないものばかりだ。

「たくましいな……セレン」

「あんまり攻撃魔法は得意じゃないけどね。回復魔法は得意だよ。ところでお兄ちゃん、自分の準備は良いの？」

「ああ。俺はこれを持ってただけだしな」

腰のホルスターに掛かった魔法銃を指さす。

それはかつて父親から譲り受けた大切なものだ。

「そっか」

短く返事をしてセレンは自分の身長ほどもある杖を抱き抱える。

杖本体はセレンが魔法学校に入学した際にアルクが贈ったものであり、先端にはめ込まれた白い魔宝石は母親から預かったものである。

それぞれの装備をしばらく二人は強く握った。

(父さん、しっかりセレンを守るからな)

(お母さん、私に力を貸してね)

互いに気持ちを込め、それから立ち上がる。

「よし！ いくか！」

「うん！」

依頼のあった村は徒歩で行っても3時間ほど、しかし二人は運良く行商の馬車に相乗りさせてもらうこととなっ

た。

リンゴの箱の隣に二人並んで腰掛けながら、流れていく風景を眺める。

「久しぶりだね。二人で外に出るのって」

「そうだな。俺は依頼、お前は授業ぐらいでしか外に出ないからなあ」

木々がまばらに生える街道は平穏そのものであり二人はしばらく風に身を任せていた。

城壁に囲まれた街が山陰に隠れ、澄んだ水が流れる小川が現れる。

大空を鳥がゆっくりと舞い、野生の馬が草をはむ様子が見える。

時折聞こえるのは馬車を引く馬の蹄の音と、車輪の転がる音、四肢を広げた木に住まう小鳥たちの鳴き声だけだ。

「いやほんと、平和だなあ」

「そだね」

馬車の荷台に乗って揺られていると、御者から声が掛かった。

「お二人さん。ちょっといいか？」

困った表情の御者に対しアルクが反応した。

「はい。どうしましたか？」

「露払いをしてくれねえか。前に二匹、はぐれのウルフが居やがる」

御者が馬車を止め、馬車から降りた二人が前方をうかがう。

そこにはいかにも腹を空かせた獣といった様子のウルフが二匹見えた。

中型犬程度の大きさに、黒い毛並みを持つウルフは白い牙と敵意を剥き出しにしている。

「お兄ちゃんあれが……」

「ああ、ウルフだ。依頼の相手とは違うけど……まあ腕試しにはちょうど良いだろ」

「分かった。がんばる」

「あんたら、頼んだぞ！」

御者の声を皮切りに二人が走り出す。

「任せとけ！」

馬車をかばうように二匹のウルフの前に走る。

アルクがホルスターから素早く銃を抜き出し、安全装置を解除、スライドを引き初弾を装填する。流れるように一連の行動を終えた後、大ざっぱに狙いを定める。

「まずは一発！」

牽制のためウルフの前方の地面に一発打ち込んだ。

手元に軽い衝撃を感じると同時に、打ち出された弾丸が軽い破碎音とともに、地面を薄く抉る。

セレンはアルクから一步下がり、力を杖に集中させ機会をうかがう。

一方ウルフは牽制射撃に怯えることなく、弾痕を避けるように分かれて移動。そのまま二人を左右から挟撃した。

「セレン！ 任せた！」

唸りをあげるウルフが飛びかかる瞬間、アルクが合図を出す。

「任せて！ 『フィールド・バリア』！」

セレンが力ある言葉を唱えると、魔力で出来た殻が杖の魔宝石から広がり、二人を包むようにドーム型の防壁が展開される。

左右から飛びかかったウルフの体は青白く光る防壁に大きくはじかれ、僅かに離れて着地する。

(今だ！)

アルクが体の前に突き出すように銃を構える。

(しっかり狙って……)

「セレン！」

「分かった！」

最小限の言葉のやり取りで互いの意志が伝わった。

セレンが防壁を解除した瞬間、アルクが体勢を整える前のウルフを攻撃する。

正面からまともに銃撃を受けたウルフは魔力衝撃により大きく弾き飛ばされ気絶した。

一方セレンもすぐさま次の手を打った。

（相手は動物……だったら有効な魔法は……炎！）

響く銃声が鳴り止む前にセレンは再び杖に魔力を込める。

仲間がやられたことに一瞬ひるんだウルフの隙を見逃さず、セレンは杖の先端をウルフに向けた。

「いっけえ！ 『ファイア・スプリングル』！」

セレンの魔力が集結し、小さな炎の玉となってウルフに襲いかかる。

いくつかが直撃したウルフは戦意を失い、街道沿いの森の中へと逃げていった。

「か……勝ったの？」

ウルフが逃げて行った森を見つめ、セレンが声を漏らした。

「よし。ま、こんなもんだろ」

葉室内の弾丸を抜き出しながらアルクがセレンの方に向き直る。

「どうだった？ 初めての实戦は」

「うん。いい感じだよ」

セレンの表情に恐怖や過度の緊張感がないことにアルクは安堵した。

「それはよかった」

「でも、お兄ちゃんもうちょっと攻撃してもよかったんじゃない？ 魔法使うの結構大変なんだよ？」

頬を膨らませるセレンに対しアルクが答える。

「仕方ないだろ。弾数は限られてるし、ただじゃないんだから」

「うー……」

魔晶石の埋め込まれた弾丸は剣や槍、矢に比べれば高価である。その分誰でも扱うことができるのだが、家計の苦しいアルクたちにとって乱用は禁物であった。

軽い一戦を終え、馬車に戻った二人に、御者が果実を投げ渡す。

「お二人さん、ありがとよ。ほれ」

「え？ 何です？」

突然のことにアルクが疑問を投げかける。

「ベゼル産のリンゴだ。それしかねえが良ければ食ってくれや」

「いいんですか？」

「こっちゃあただで護衛を頼めたようなもんだからなあ。それくらいは安いもんよ」

御者が豪快に笑うと、二人もそれにつられて笑顔になった。

「ありがとうございます。いただきますね」

セレンが応え、戦闘前と同じように二人並んで馬車に乗る。

「うん、甘いなあ」

「みずみずしくて、美味しいね」

全く同じ動作で赤いリンゴにかじりつく二人。

馬車は再び動きだし、流れていく景色は先ほどの戦闘が嘘のように穏やかなままだ。

小川にかかる橋を越え、山の方へ向かう。

背景程度の大きさだった山脈が存在感を増してきたころ、御者から声がかかった。

「お二人さん。そろそろ村が見えてきたぜ」
リンゴにかじりつく二人の先に、目的の村が見えてきた。
山のふもとの小さな村、それが今回の依頼場所である。

馬車を降りた二人を出迎えたのは初老の男性だった。

「おお、よく来て下さった」

杖を突きながら歩み寄る男性に対してアルクがギルドから預かった依頼書を提示する。

「ええと、村長さんですね。エオイア王都公認ギルド、『宵の風』より参りました」

依頼書を確認した後、村長はアルクとセレンを交互に見て、やや不安そうに声を上げた。

「お二人さんですか？」

村長の不安を払拭するために、アルクは毅然とした態度で答えた。

「はい。私と妹、二人です。依頼内容はウルフの討伐とありますがさらに詳細の情報を頂ければ幸いです。正確な情報は速やかな依頼遂行に繋がりますので」

あえて少し声を張ったアルクに自信を感じ取ったのか、村長に安心の表情が見えた。

「おお、これはこれは。お若いのになんと心強い！ さあこんなところで立ち話もなんですから、とりあえず家にお越し下され」

そういうと村長は二人を村の中へと案内する。

魔物避けの為に設置された、簡易な木製の門をくぐる。

番兵というには若い少年が緊張したやや様子で二人の背中を見送った。

「お兄ちゃん、普段と全然違ったね」

アルクの隣に並び、小さな声でセレンが話す。

「まあ、こういうのはイメージというか態度というか、そういうのが大切だからな」

「へえー、普段も依頼の時はこんな感じなの？」

「ああ。特に魔道具の修理とかは気難しい金持ちとかが依頼してくるからな。俺はぱっと見てただのガキだし、こういうところで信頼を得とかなないと」

「……結構考えてるんだ。でも、ちょっとカッコ良かったかも……」

「ん？ なんか言ったか？」

「ううん！ 何でもない！」

村長の後ろについて二人は村の中を進んでいく。

農作物で生計を立てている村らしく、畑には多くの人が作業をしているのが見える。

家のほぼ全てが木製で、石できているものは風車小屋くらいしかない。

二人を追い越すように蝶が舞い、田畑を繋ぐ水路には、小さな生き物たちが水面に波紋を描く。

ほとんどが石造りのエオイア王都には見られない光景だ。

特筆すべきものはないが、二人はこの村の雰囲気が好きになりつつあった。

しかし、セレンはある違和感に気が付いた。

「男の人が少ないね」

セレンが漏らした感想に、村長が反応した。

「今、村の若いものは隣国へ行商に出てるのじゃ。おかげで村で戦えるものはほとんどおらん。ウルフ退治にも手を焼く始末じゃ」

子供と女ばかりが目立つ村の中で、一回り大きな家の中に三人は入っていった。

豪華とは言えないテーブルに着くと、二人の前に地図が広げられた。

村長が水を入れたコップを並べ、席に着いたタイミングでアルクが依頼に関しての質問を開始する。

「討伐対象は野生のウルフとありました。現在どのような被害が出ているか、ウルフは何頭くらいか、どこからやってくるかを分かる範囲で教えて下さい」

「うむ。ウルフの被害は一週間ほど前から始まったのじゃ。奴らは5、6頭で村の畑を荒らし来る。いつもは村の西から入ってくるが……いかんせん子供に剣を持たせている状況じゃ。奴らの寝床まで探せてはおらん」

ここまで一気に説明すると、村長は大儀そうに水を飲んだ。

（やっぱり入り口の子供は番兵か。せめて銃でも持たせられればいいけど。村の財政的にそれも厳しいか）
アルクは思案しながら地図を眺める。

村の西には傾斜のある森が広がっている。野生動物の寝床には最適だろう。

「セレン、何か質問しておく事はないか？」

「へ？」

「ウルフは普通、夜行性だ。攻略は日のあるうちにしてしまいたい。問題がないならすぐにでも出発しようと思う」

外交モードのアルクに戸惑うセレンだったが、とりあえず思いついた質問をすることにした。

「ええと、今までもウルフの被害ってあったんですか？」

「いや、わしも長いこと生きてきておるがウルフの被害は初めてじゃ。そうでなければ若い者たちを皆、行商に出しはせん」

「ということは最近ウルフの生息地が変化してきているということでしょうか？」

「うーむ、専門家ではないからのう。詳しいことは分からんが、普段はもっと北に住んでおると聞く」

「そうですか。ありがとうございます」

付近の地図を借り受け、二人は再び村の中を進む。

「はあ〜」

張った気を口から抜くようにアルクが大きくため息をついた。

「ど、どうしたの」

「いやあ、結構疲れるんだぜ？　ずーっと外交モードなのって」

「今はもういいんだ」

「まあ、森を歩くのに礼儀も何もないからな！　マナーはあるけど」

「マナー？」

「ゴミは持ち帰る！　森に捨てない！」

言い放つアルクの顔には先ほどまでの凛々しさは微塵も残ってはいなかった。

「……いつも通りで何よりだよ」

村の西口に向かう二人の先に10歳ほどの少年が立ちふさがった。

「……どうした？　門を守らなくてもいいのか？」

アルクが少年の腰に不釣り合いなほどに大きなハーフソードが下げているのを見て、質問をした。

しかし少年は質問には応えず、まっすぐ瞳を二人に向ける。

「お、俺も連れてってくれ！」

「ん？」

理解できないという様子のアルクに代わり、セレンがしゃがみ込み、少年と目の高さを合わせた。

「どうしたの？」

「あんたらウルフの退治に行くんだろ!? だったら俺も連れてってくれ！」

「でも……危ないよ？」

「妹が襲われたんだよ！ あいつ等に怪我させられたんだよ！」

「いや……でも……」

セレンが言い淀むと、それまで黙っていたアルクが声を発した。

「だから、これ以上被害を出さないために俺たちが行くんだ。そして、その間にもウルフたちは村へ来るかもしれない」

「……ッ！」

「だからそれまでの間、君が村を守るんだ」

「……………」

黙ってうつむく少年の頭の上にアルクが手を置く。

「大丈夫、君なら出来る。そして俺たちもやり遂げる。最後には妹さんのお見舞いにも行かせてもらうよ」
安心させるように、言い聞かせるように、言葉を選びながらゆっくりと少年に語りかける。

「……本当だな？」

「ああ。約束する。君の名前を教えてくれ」

「ジェラルドだ。あんたは？」

「アルク、こっちがセレン」

「よろしく頼む……ウルフはたぶん洞窟の中にいる」

「洞窟？ でもどうしてそんなことを知っているんだ？」

「あいつ等が荒らしていった後は『このじゃない土』があるんだ。もっと柔らかくて、たまに苔が混じってる」

「なるほど。ありがとう、それはかなり貴重な情報だ」

「気をつけてな」

「ああ。行ってくる」

少年に別れを告げた二人は村を出て、森の外周部へとたどり着いた。

歩きやすい平原はここで終わり、目の前には木々が鬱蒼と生い茂る暗い森が広がる。

「……討伐依頼はいつもこんならしい」

「……………」

「みんなが頼ってきて、応援してくれて、それで失敗したらまるで重罪人のような目で見られる。ま、聞いた話
だけど……」

「……………」

「金の為だけじゃなくなってしまう。いろんな人のいろんなものも背負ってしまうんだってさ」

簡単な敵、大きな見返り、それだけを見て二人はこの依頼を受けた。そのことは何も間違っていないし、非難されることでもない。

しかし、それと同時に背負うものの大きさを二人は感じていた。たかがウルフ、しかし力を持たない人々にとっては大きな脅威となる。

『だから』

独り言のように話していたアルクと、それを黙って聞いていたセレン。二人の声が重なる。

「……行こうか」

「うん」

柔らかな腐葉土を踏みしめ、二人は森の中へと入っていく。

エネルギーシステム、魔導循環サイクルの機動を開始

エラー

外部端末によって起動が制限されています。

魔力収集システムによる二次起動を開始

エラー

周辺魔力が規定値以下です。

魔晶石エンジンによる三次起動を開始

エラー

起動に必要なだけの魔晶石がありません。

三段階起動システムの全失敗を確認

起動できません。

機動できません。

内部システム、ハイバネーションモードに移行します。

神妙な面持ちで森へと進んだ二人だったが、五分も歩くうちにそれも終わった。

「きゃあ！ 引っかかった！ お気に入りのコートなのに！」

「うおお！ 痛ええ！ セレン、ここ棘があるぞ！」

王都暮らしの二人にとって、自然豊かな森の中は未知の領域だった。

数歩進んでは引っかかり、数歩進んでは棘に刺さり、数歩進んでは転びながら二人は進んでいく。

「もういやあ、だからあっちの獣道行こうって言ったのに！」

嘆くセレンに対してアルクが叫び返す。

「だから！ さっさと行かないと日のあるうちに王都に帰れないだろ！ 路銀なんて持ってきてないぞ！」

「このままだったら生きて帰れるかも怪しいよ！」

喚き騒ぎながら進むうちに、アルクが何かを見つけた。

「ん？」

「どうしたのお兄ちゃん？ なんか見つけた？」

しゃがみこみ何かを拾い上げるアルクの背中側からセレンが覗き込む。

アルクの手の中には、わずかに緑色を含んだ湿った土のかけらがあった。

「この土、苔が生えてる……」

「!? ってことは……」

「ああ。この近くにウルフの住処があるかもしれない。セレン、なんかありそうか？」

「近くにはなんも見えないけど……ちょっと待って」

一度深呼吸をして、セレンが自らの知識を探る。

(ウルフの生態……確か基礎魔法生物でやったはず……)

「たしか、木の洞とか洞窟の中とか、日中あまり日が当たらないところに住んでる……って習った」

その言葉を聞き、立ち上がるアルク。

周囲を見渡し、当てはまりそうな場所を探す。

「あー、あっちとかどうだ？ 崖になってて洞窟とかあるかも」

「うん。行ってみよう」

騒ぐのをやめ、先ほどより慎重に進んでいく。

二人の進む先にはかなりの高さのある崖があった。

「結構最近できた崖みたいだね」

崖を見上げ、そのあと周囲を見渡しセレンが言う。

「え？ そんな事も分かるのか？」

「うん。崖に草とかが生えていないし……ほらあの木を見て、土砂に少し覆われてる」

「そうか……ていうことは……………どうということ？」

「ウルフは最近ここに住み着いたってこと。ほら、あの大きな岩の影まで足跡が付いてる」

「おお、さすが」

崩れ落ちて間もない柔らかな土の上に、ウルフの足跡が複数連なっている。

周囲を警戒しながら二人は岩陰まで進んだ。

身を乗り出し洞窟を覗くと、それは二人の予想以上に大きなものだった。

「広いなあ」

「広いね」

見たままの感想を述べた後、アルクは銃を取り出し各部をチェックする。

「動作不良は無し。砂、石の詰まりも無し。残弾数は 22 っど。よし、じゃあセレン、ここで待ってろ」

「ふえ？」

余りに唐突なアルクの言葉にセレンは変わった言葉で反応した。

「いや……だってこっからは危険だろうし」

「いや、待ってよ。それじゃあここまで来た意味が無いじゃない」

「えーと……でもなあ……」

「この洞窟、結構広いよ？ 明かりなしで進める？」

「うーん。分かった分かった。でも後ろから離れるなよ」

「分かればいいのよ」

「はあ……」

一歩洞窟内へ入ると、途端に空気が変わった。

湿気を含んだ冷たい風が二人の頬を撫でる。

「足元、気をつけろよ」

「分かってる」

土砂崩れによって現れた洞窟は、入り口付近は岩や砂が多くあった。

流れ込んだ雨によってできた水たまりを避けながらさらに進んでいく。

入り口が大きく開いていたため、洞窟内にはそれなりの明るさがあり、進むのはそれほど苦ではない。

大きな岩を乗り越え、小さな岩を避け、小石を踏み、砂利道を超え、二人は同時に驚きの声を上げた。

『これは！』

暗い洞窟の中に階段があった。

長い年月を地中で過ごしたためか、風化は少ない。馬車も余裕で通れる幅、高さの下り階段が暗がりの中へと続いている。

「お兄ちゃん……」

セレンが小さな声を出した。しかし広く、静かな洞窟の中ではその声も何度も反響する。

「……」

そしてその反響音は階段の下へと消えていった。

袖をつかむセレンの手を、アルクが少し強く握り返す。

「セレン、今から俺の後ろを絶対に離れるなよ」

「……うん」

生唾を呑み込みゆっくりと階段に足をかける。

周囲に視線を走らせながらアルクは必死に状況を整理しようとしていた。

(おそらくここは土砂崩れで露出した遺跡の一部。ウルフが住処にするぐらいだから危険なトラップはないと思うけど……)

壁、天井に何か変化がないかを探すが、模様すらないそれらは奥まで続いている。

(人間にだけ反応するトラップもあるって聞かし……少しでも危険を感じたら帰ろう。遺跡探索なんて俺たちに勤まるわけがない)

足音を殺しながら下りていく二人の耳に、低い呻き声が聞こえた。

驚きを殺すようにセレンの体が震える。

一方アルクは僅かに安堵する。

「セレン安心しろ。ただのウルフの声だ」

「う、うん」

「さっさと倒して村に戻ろう」

何が出てくるかわからないよりも、先ほど倒したものがいると分かった方が安心する。

二人は進む速度を僅かに上げ、階段の一番下までたどり着いた。

広い階段はそのままさらに広い部屋へと繋がっていた。

エントランスホールのような空間には巨大な柱が二本並んで立っている。

他に一切の物がないことがさらに柱の存在感を大きくしていた。

「お兄ちゃん……あそこ、柱の影」

「……見えた、ウルフだな。でも戦闘するには暗いか」

向かって左の柱の裏に身を丸めるウルフの姿が見える。

しかし長い階段を下るうちに差し込む陽の量は減り、ホールの中は暗い。

このまま戦闘をするには二人にとってはやや不利である。

アルクは屈み、声を抑えながらセレンに作戦を伝える。

「よし。作戦を伝える。セレンは魔法で明かりを点けて、あとは補助に専念。攻撃魔法は使わなくていい」

「うん。お兄ちゃんは？」

「セレンの少し前で敵を攻撃する。こっちは飛び道具持ちだ。なるべく距離を開けて、出入り口付近で戦おう」

「うん、分かった。でもお兄ちゃん気を付けて。なんか変な感じがする。」

そのとき、二人の会話をウルフの優れた聴覚が捉えた。

警戒しながら二人へと近づきだし、さらに柱の陰から六匹のウルフが現れる。

(予想より多いけど……)

「セレン、やれっ！」

『『ホーリー・ライト』！』

セレンの杖の先端から光の玉が飛び出し、ホール内を照らし出す。

照らし出された七匹のウルフが飛び出すと同時にアルクが前に出る。

(まずは敵の数を減らす！)

「喰らえ！」

真っ直ぐに向かう先頭のウルフに対しアルクが二発の銃弾を放つ。

しかし狙われたウルフは素早くに跳び、外れた弾丸は床の岩を僅かに削っただけだった。

(こいつら！ さっきのと全然違うぞ！)

続けてさらに三発撃つが、焦りを抑えられないアルクの弾丸はことごとく外れた。

「お兄ちゃん！」

あまりに違うウルフの強さにセレンが声を上げる。

最後の一発を飛び避けたウルフがそのままの勢いでアルクに飛び掛かった。

「セレン！ 盾を！」

「守って！ 『フィールド・バリア』 !!」

光る防壁がアルクを包み、ギリギリのところまでウルフの攻撃を阻む。

しかしウルフは隔壁に爪を立て、そのまま取りついた。

「くうっ！」

防壁からスパークするように光が飛び、急速な魔力の消耗にセレンが苦しげな声を上げる。

(セレンを、守らないと！)

焦る思いを押さえつけながら、行動をする。

防壁内のアルクはマガジンを素早く交換、スライドロックを解除し、セレクターを操作、再び銃を構える。

(飛び跳ねて避けるなら！)

「セレン！ 吹き飛ばせ！」

「っ！ 『バリア・バースト』 !」

アルクの合図、セレンの言葉とともに防壁が外へ弾けるように消える。

衝撃に押され、大きく宙を飛ぶウルフに狙いを定める。

「当たれえ！」

声とともにトリガーを引き絞る。

フルオートで連射された銃弾が無防備なウルフに浴びせられる。

頭、腹に銃撃を浴び、地面へと叩きつけられたウルフはピクリとも動かなくなった。

しかし危機は過ぎ去ったわけではない。

僅かに距離を空けてこちらに向かっていた残る六匹のウルフが襲い掛かる。

「セレン！ 下がるぞ！」

残る弾数は僅か、そしてセレン自身の消耗も大きい。

圧倒的不利を感じたアルクが牽制射撃を行いながら後ろを振り返る。

「わ、分かった」

アルクの視線は信じられないものを捕らえた。

やや苦しげに返事をするセレンの後方、降りてきた階段の方から新たに三つの影が現れる。

(くそっ！ まだいたのか!?)

「後ろだ！ 後ろにいるぞ！」

「っ！ 『フィールド・バリア』 !」

慌てて防壁を展開したセレンに新たに表れた三匹のウルフが同時に飛び掛かる。

防御に成功はするが、ウルフたちは防壁に何度も爪を立てる。

防壁に爪が食い込む度に光が四散し、徐々にセレンを守る光が薄まっていく。

「セレン！」

「……………」

アルクが声をかけるが返事はない。

杖を抱いたままセレンは膝をついた。

「くそおお！」

迫る六匹のウルフに背を向け、セレンへと走り寄る。

防壁が砕け、ウルフの牙が、爪がセレンに迫る。

セレンに迫るは三匹のウルフ、セレンとアルクの距離は数十メートル。

セレンの柔らかな肌をウルフたちが引き裂くには一秒とかからない。

「間に合えええええ！」

一秒にも満たない瞬間がアルクには永遠のように感じられた。

ウルフの吐き出す吐息、僅かに揺らぐセレンの髪。アルクの後ろから追いつがるウルフの足音。

自分だけがスローな世界に取り残された感覚の中、アルクは強く思う。

（守りたいんだ！）

あの日、約束したことを。

（あいつだけは絶対に！）

魔法銃とともに父から受け継いだ心を。

（だから……）

大切な人を守ると言う——

（力を貸してくれ！ 父さん！）

——強い心を。

そして光が、少年の体を包んだ。

眩い閃光にウルフの動きが一瞬止まる。

そこに三本の光のラインが突き刺さった。

「えっ!？」

突然の、自らが起こした奇跡にアルクが驚く。

光に吹き飛ばされたウルフたちはもはや息をしていない。

（なんだ今の……突然……光が……）

しかしアルクはさらなる変化に気が付いた。

父親から受け継いだ一丁の魔法銃を『両手に持っていた』のだ。

（二丁に……増えた？）

疑問を持ちながらも、アルクはそのままセレンに駆け寄る。

セレンが倒れそうになる瞬間、何とか腕で抱き留めることができた。

（魔力の使い過ぎか……くそ！ 俺がしっかりしていれば！）

「お……兄ちゃん？」

「安心しろ、お兄ちゃんが絶対に守ってやるからな！」

「い……やあ」

「そこで少し休んでろ」

四肢に力が入らないセレンをゆっくりと寝かせ、残る六匹のウルフの方へと向かう。

突然のアルクの変化にウルフは距離を置き様子をうかがっている。

（絶対に守る！）

左右の手に握られた二丁の銃、初めて持つそれはアルクのために作られたように手に馴染む。

ウルフから目を離すことなく、素早く銃をチェックする。

（基本は変わってない。でも大きく違う。マガジンがない！）

弾丸を装填するための弾倉が無い。

それを確認した後、両方の手を突き出し、銃口をウルフへと向けた。

（ということはおそらく……！）

銃に取り付けられた照準を無視し、撃ち抜く目標を視線で貫く。

「はぁあっ！」

気合とともに両方の引き金を引く。

すると、銃口から僅かに離れた位置に光の玉が現れ、それは二本の光の尾を引きながらアルクの視線の先にいたウルフを貫いた。

（これは魔力を直接撃ち出す！）

二発の銃撃を浴びたウルフは僅かに呻いた後、動かなくなった。

敵を倒した確かな感触と、魔力を消費したことによるフィードバックを感じながら残る五匹のウルフと対峙する。

（行ける！ 行けるぞ！）

五匹のウルフは互いに距離を取り、アルクを取り囲むように広がった。

しかしアルクに恐怖心はない。

自分に与えられた力でどこまでできるか。それだけを考えていた。

（出来るはずだ！）

自分にそう言い聞かせ、次々と引き金を引く。

現れた光の玉は発射されず、その場に留まる。

アルクの周囲に四つの光の玉が浮かぶ。

（よし！）

二匹のウルフを同時に視界に入れもう一度引き金を引いた。

それを合図にしてウルフ二匹に二つずつ光の玉が発射される。

あまりに高速なそれにウルフたちは対応できず、銃撃をもろに浴び倒れた。

残り三匹。

（もう一息だ！）

油断せず、勝利を確信したアルクの耳に、これまでの戦闘音とは全く違う音が聞こえてきた。

それは大地を揺るがすような、連続した低音。

アルクにはどこかでそれを聞いたことがあった。

（なんだ……この音……どこかで……）

唸る音に恐れをなしたのか、残る三匹のウルフはアルクにも、倒れているセレンにも目をくれず階段を駆け上っ

ていった。

しかしウルフが去っても音は鳴りやまず、むしろ一層その音は大きくなっていく。

アルクたちが下りてきた階段の、部屋を挟んで向かい側の扉が音を立てながら開きだした。

扉の隙間が大きくなっていくと同時にアルクは音の正体を思い出した。

(魔導エンジンの音だ……ってことは……)

セレンの残した光が、扉の向こうのそれを照らしだす。

「魔導……機械兵器……」

(確か前に聞いたことがある。高度文明の遺跡にはそれを守る仕組みがある……)

鋼に身を包んだサソリに似たそれが、赤く光る眼をアルクとセレンに向けた。

「侵入者ヲ確認。侵入者数2。排除セヨ、排除セヨ」

「まずいっ！」

慌ててセレンのもとに駆け寄り、二丁に増えた銃をポケットに押し込み、セレンを抱きかかえる。

そして階段の方へと駆け出した。

「システム戦闘モード。攻撃開始。排除セヨ、排除セヨ」

不吉な声を背中で聞きながら階段へと走る。

しかし、そんなアルクを追い越して赤い光が壁へと突き刺さった。

「え？」

次の瞬間、石でできた壁が、まるで初めから爆弾が仕込まれていたかのように爆発した。

崩れ落ちた瓦礫が、アルクたちの退路を塞ぐ。

「うそだろ!?!」

驚愕の声を上げる間にも敵の攻撃は止まらない。

アルクは崩れた瓦礫の影に飛び込むように逃げ込んだ。

(これはもう……腹をくくるしかねえな)

なるべく安全な場所にセレンを下そうとした時、セレンが目覚めた。

「お兄ちゃん……」

「セレン、ここに隠れてろ」

「いやああ……お兄ちゃん……」

「大丈夫だから」

震える手でアルクを握るセレンの手を、そっと解く。

「……そこで待ってろ。絶対にお兄ちゃんが守ってやるから！」

銃を取り出し、瓦礫の影からアルクが飛び出していく。

アルクが飛び出した直後から、魔導兵器が唸りを上げる音が大きくなった。

しかしセレンにはアルクのその言葉と、行動が何よりも恐ろしかった。

子供のころの記憶、家族が引き裂かれた記憶がフラッシュバックする。

(だめだよ……お兄ちゃん……行っちゃだめ……行ったら……)

しかし魔力を使い果たしたセレンには物陰で震えることしかできなかった。

(いやだ……)

かつて無力さに嘆き、セレンは後悔した。

それから必死に学び、訓練し、ようやくアルクの役に立てる程度になった。

そう思った。

しかしそれは幻想だった。

(私は……………何も……………)

「くそっ！ ちょっとぐらい効けよ！」

先ほどから何発も直撃させているが、敵は一向にひるむ気配もない。

機械に知識を持つアルクは関節などの装甲が薄い個所を狙っているが、それでも効果は目に見えない。

敵の攻撃は大味で精彩を欠いているため、素人のアルクにも避けることは難しくなかった。

しかし相手は疲れを知らない魔導兵器。

魔法射撃とウルフとの連続した戦闘によって疲弊したアルクにとって危険な戦いであった。

サソリに似た敵は鉄を突き出し突進してくる。

それを大きく避けると、敵はそのまま壁に激突した。

「今だ！」

後ろに回り、至近距離から銃撃を叩き込むために接近する。

「喰らえ！」

狙いを定め、引き金を引く。

しかし、光の玉は発射されなかった。

「ウソだろ……………」

そこまでなってようやくアルクは自分の体の異変に気が付いた。

魔力を消費しすぎ、力が入らなくなっていたのだ。

気が付いた途端に、体がまるで鉛のように重くなる。

(これは、まずいかも……………)

膝をつき動けずにいるアルクの目の前で、敵の長い尻尾が振り上げられる。

何か塊を叩きつけるような音がしてから、戦闘音が鳴り止んだ。

セレンは震える足に力を込め、瓦礫の影から様子をうかがう。

そこでセレンが見たものは、壁に頭を埋めてもがく魔導兵器と、倒れて動かなくなった兄、アルクの姿だった。

「お……………お兄ちゃん？」

這いずるように兄に近寄るセレン。

(音がして、お兄ちゃんが倒れてる)

滲み揺らぐ視界の中、ようやく兄のもとへと辿りつく。

(あいつに吹き飛ばされた？ 何メートル？)

受け入れたくない状況に、かえって思考がクリアになる。

「大丈夫？ 待ってて、いま回復魔法かけてあげるから」

力が入らない指先で杖をつかむ。

「すぐに……………すぐに魔法を……………」

しかし枯渇したセレンの魔力は力を生み出せず、震える指先が杖を取り落した。

乾いた音を響かせ杖が転がる。

それを拾い上げようとして、セレンは見てしまった。

「や……………いやあ」

倒れる兄を強調するように、歪に広がる真っ赤な血液。

「お……おにいいい……ちゃ……」

兄に触れた手が、赤く塗れる。

機械兵器が壁から抜け出し、セレンの方向を向いた。

「侵入者数残り1。排除セヨ、排除セヨ」

しかし、その音も、声も、セレンには届かない。

掌の赤が、セレンの思考すらも染め上げていく。

「いや……いやああああああああ!!」

セレンの中で何かが弾けた。

制御を越えた力が収束し、燃え上がる。

爆発的に広がる魔力の奔流が、ホール全体を呑み込んだ。

「父さんはこれから村の皆と悪い奴らをやっつけに行く。母さんも一緒だ」

「……うん」

「アルク、そんな顔をするな。男の子だろう？」

「でも……」

「ほら、これをやろう。父さんの銃だ」

「嫌だよ……こんなの……持ちたくないよ」

「それでも、だ。いざとなったらこれでセレンを守ってやれ」

「……うん」

「大丈夫だ。父さんは強いからな。エリシア！ 準備はできたか！」

「待つて頂戴！ ほら、お守りよ。持っておきなさい」

「母さん……」

「どこへ行けばいいかはわかっているわね？」

「うん。村を出て、森を越える」

「そうよ。そこにはカッコいい騎士様がいるから。そこまで頑張って走りなさい」

「……エリシア！ 敵が近い！ 行け！ アルク、セレン。 走れ！」

「わかった！」

「おとおさん……おかあさん……！」

「セレン！ 行こう！ 大丈夫、お兄ちゃんが守ってやるから！」

「……っああ」

間延びした情けない声を上げながらアルクが目覚めた。

「どこだよ……」

そうつぶやき、辺りを見回す。

先ほどまでいたホールとは違い、壁は石造りではない。

金属で作られた壁や床は規則的に青白く明滅している。

その床に背中を預ける形で、アルクは倒れていた。

天井は異常なほど高く、途中から石造りになっている。

（上から……落ちたのか？）

「なんで、こんなところに……確か……」

頭を押さえ、途切れる前の意識を遡ろうとする。

（そうだ。ウルフが逃げた後、あいつが出てきたんだ。逃げる場所が無くて、仕方ないから戦って……それで…
…それで……）

しかしどれほど努力しても、それ以降の記憶が思い出せない。

（声が……聞こえた気がする……父さんと、母さんと……セレン）

「……セレン？」

そこまで考えようやくアルクはすべきことが分かった。

「いたた……セレン、どこだ？」

全身が打ちつけられた痛みに声を上げながら、身を起こす。

足下に落ちていた二丁の銃を拾い、立ち上がった。

完全な四角形の部屋には、上層から落下してきたと思われる石材が大量にあった。

石材は、手のひらに収まる程度の物があれば、見上げるほど大きなものもある。

しかし、アルクの周りにはほとんど何も落ちてはいなかった。

「セレン！」

数メートル離れたところで横になる様に倒れていたセレンを見つけ、駆け寄る。

「おいセレン、大丈夫か？」

ゆっくりと抱き起こすと、セレンが意識を取り戻した。

「おにい……ちゃん？」

「ああ。お兄ちゃんだ。大丈夫、ここにいるぞ」

「……よかった」

「待ってろ、いま水を持ってきてやる」

セレンを壁にもたれさせ、瓦礫の隙間から荷物袋を引きずり出す。

水の入った革袋を取り出し、封を開け、セレンの口元まで持っていく。

「ほら……少し飲んでおけ」

「うん……ありがと……」

水を飲み、一息つくセレンにアルクも安心する。

「どっか痛いところないか？」

「大丈夫……」

そうは言うものの、先ほどからセレンの様子は熱にうなされているそれに近い。

散らばった荷物を集め、アルクがセレンの隣にひざをつく。

「さっきから苦しそうだけど……本当に大丈夫か？」

「うん。怪我とかじゃ……ないよ。ただこの辺りに魔力を押さえつけるような結界があるみたいで……」

「魔力を押さえる？」

部屋を見渡すまもなく、青白く光る光が関係していると予想がついた。

「だから……ちょっと苦しいかも」

（そっか。俺は何ともないけど、魔力の強いセレンはそれだけ受ける影響も大きいのか）

汗の浮かんだセレンの額を袖で拭い、セレンに背を向けて屈んだ。

「ほら、セレン。乗れ」

「うん……」

状況故に言い返すこともせず、おとなしくセレンがアルクの背中に収まる。

「よっと」

声とともに立ち上がり、唯一の出入り口らしい通路へと向かう。

青白く明滅する光に照らされ、人工的な直線を持つ通路が見える。

(なんだこれ……遺跡にしては変だ……)

アルクの靴が床をたたくと、自然の洞窟とは違う金属の音が響く。

(全部金属性だし……師匠のラボみたいだ……)

規則的な足音を立てながらアルクが通路を進む。

左右の壁はアルクを導くように優しく光り、路を照らす。

「セレン、平気か？」

「うん……でもちょっと結界が強くなってきてる」

「そっか。なるべくさっさと出口を探そう」

歩みを早めるアルクの耳に音が聞こえてきた。

(この音……さっき聞いたような……)

急速に膨らむ嫌な予感に、ゆっくりと振り返る。

(まさか……ね?)

後ろの通路の先には先ほどまでアルクたちが倒れていた部屋しかない。

そしてその部屋の中から赤い光が見えた。

おそらくアルクたちと一緒に上層から落ちてきたのだろう。

狭い扉を強引にこじ開け、サソリ型の敵が通路へと侵入してくる。

(さっきの……まだ動いてんのかよ！)

「セレン！ しっかり掴まってろ！」

返事を待たず、肩をつかむ力が増したのを感じるとアルクは駆けだした。

それに触発されたように後ろから聞こえてくる魔導エンジンの音も大きくなる。

それだけではない、金属と装甲のぶつかり合う甲高い音が徐々に大きくなる。

(まずいまずいまずい！)

歯を食いしばり、全力で走る。

ぶら下げた袋が音を立て、空のホルスターが足を叩く。

(どっか……あいつが来れないところを……！)

一本路の終点に、人間サイズの扉があった。

しかしその扉は金属板により閉じられており、ドアノブなどは全く見あたらない。

「たぶん、これだあ！」

適当に目を付け、扉の横の丸く飛び出た部分を蹴りつける。すると空気の抜けるような音とともに素早く扉がスライドする。

「うらあああ！」

気合いとともに部屋に飛び込む。

「閉まれええ！」

半ば願うように扉に向かって叫ぶと、扉は再びスライドし空間を区切った。

その直後、壁に何か激突するような音が部屋を振るわす。

「……………」

息をのむアルクの前で、部屋の壁はその衝撃に耐えきった。

「……はあ」

脱力し、セレンに衝撃を与えないようにゆっくりと膝をついた。

「だ……大丈夫か、セ、セレン」

「はあ……はあ……」

息も絶え絶えに振り向くアルクが見たのは、それ以上に苦しそうなセレンだった。

「セレン!？」

「ここ……一番結界が強いかも……」

絞るようにそう言うと、高熱にうなされたようにセレンが苦しむ。

「まじかよ……」

(ここが結界の中心!? どうすればいいんだよ……セレンは苦しみっぱなしだし。早くどうにかしないと。どうにか……)

焦るアルクの視界に、光が飛び込んできた。

「なんだ、あれ……」

アルクが部屋を見回すと、明らかに変わったものが見えた。

アルクたちの家が余裕で収まりそうなほど大きな部屋の中心には祭壇のようなものがあった。

その中心には台座があり、拳大ほどもある光輝く宝石が乗せられている。

光の色は蒼銀、この遺跡全体を照らす光と同じ色だ。

「これが、光の元か……？」

セレンを下ろし、祭壇に近づく。

祭壇全体には何かを封印するかのよう、細やかに魔法陣が書き込まれている。

魔法陣を跨ぎ、段に足をかけると、脳を締め付けるような激痛がアルクに襲いかかる。

(これが……結界か?)

強力な結界は、僅かな魔力しか持たないアルクにも影響を与え出す。

(これが……セレンを苦しませてるのか?)

しかし、激痛に苛まれながらもアルクは不敵に笑った。

(だったら、これを……)

階段を一気に駆け上り、光輝く宝石を掴む。

「壊れろおおお！」

そしてそのままそれを台座に叩きつけた。

まるでガラスで出来ていたかのように粉々に宝石が砕ける。

その瞬間、アルクとセレンを覆っていた苦痛が霧散した。

「よし！ セレン！ これで大丈夫だ！」

素直に喜ぶアルクに対し、セレンの顔色は暗い。

セレンは光を失いゆく魔法陣を眺めながらアルクに声をかける。

「お兄ちゃん……それ、明らかに何かを封印してるやつだよ」

その声は決して荒くなく、むしろ幼子に言い聞かせるように優しい。

「え？」

「何か大きな魔力を持つやつを、それで封印してたんだよ？」

砕けた宝石を見下ろし、ゆっくりとセレンの問いに対し返事をする。

「あ、はい……恐らくは……」

「しかもそれ、お兄ちゃんでも影響を受けるくらい超強力なやつだよな？」

そういいながら、何かに用意するようにセレンが杖を持ち、立ち上がる。

「はい……仰るとおりです……」

「封印解いてどうするのよ……」

「……………」

「……………」

薄れゆく光の中、静寂が訪れる。

魔法陣の光は完全に失われ、壁の光までもが失われ出す。

「なんか……ほんとに……ごめんなさい」

「お兄ちゃんのばかぁ！」

セレンがそう叫んだ瞬間、部屋の奥から蒼銀の光が飛び出し、二人を貫いた。

『なにこれ!?!』

違う声で同じ言葉を叫ぶ二人の後ろで、部屋の壁が崩れた。

「次はなに!?!」

「うぁぁん、お兄ちゃんのせいだぁ！」

崩れた壁の向こうには、先ほどから執拗に二人を追い続けていたサソリ型の魔導兵器が鉄を振りかざしている。

外部ロックの解放を確認。

空間魔力素子急速充填開始。

エネルギーシステム、魔導循環サイクルの機動を開始。

成功

一次系、二次系、三次系の機動を確認。

内部チェック、全て問題なし。

マスターチェックを開始。

該当者複数あり。

生体情報確認。

一致率 50%以上。

特定チェッククリア

第一対象をメインマスター

第二対象をサブマスターに設定

「セレン！ まずは距離をとれ！ こいつは動きがノロいし狙いも適当だ！」

「わかった！」

蒼銀の光のことはとりあえず無視し、二人が左右に距離をとるように走り出す。

魔導兵器は一瞬考えた後、セレンの方へと向かいだした。

「お、お兄ちゃん!?! こっち来た！ こっちに来たよ!?!」

「待ってる！ 援護射撃だ！」

ポケットから二丁の銃を取り出しすぐさま発射。

打ち出された魔力弾は敵の注意をアルクに向けさせることに成功した。

「よし！ いける！」

喜ぶアルクに対して、セレンが驚きの声を上げる。

「魔力弾!? お兄ちゃんそんなこと……ってそれ二個も持ってたっけ!？」

「説明は後だ！ セレン、魔力ちょっとは回復したか!？」

「だ、大丈夫！」

「だったらいい！ 魔力は全部攻撃に回せ！ 敵の攻撃は気合いで避ける！」

「気合いで!？」

「気合いで!!」

エネルギー充填完了。

独立行動型戦闘魔導機人 MMHW-00X 個体名称 FION を起動します。

最終シーリング解除

「くそっ、いい加減に止まれ！」

アルクは目標を絞り、引き金を引ききる。

連続発射された弾丸は、そのほとんどがなめらかな装甲にはじかれ、有効なダメージを与えられない。

『ライトニング・ライン』！ 『チルド・ウインド』！ 『ファイア・スプリングル』！」

セレンが力を込め叫ぶと、攻撃魔法が三連続で浴びせられる。

しかし、電撃も氷も炎も弾かれ敵の猛攻は止まらない。

鉄を、尻尾を振り回し、撃ちだされる光球が二人を襲う。

頑丈な金属でできている部屋が壊れることはなかったが、敵が攻撃を繰り返す度に、金属のぶつかる高音と部屋を揺らすほどの重低音が響く。

「お兄ちゃん！ なんかこれ無理っぽいんだけど!？」

「頑張るしかないだろ！」

軽口を叩くがお互いに限界は近かった。

魔力も体力も急速に消費され、徐々に敵の攻撃が二人を捉え出す。

「きゃっ！」

「セレン!？」

アルクが短い悲鳴を聞き振り向くと、セレンが足を抱えて倒れ込んでいた。転んで足が止まったセレンに敵が襲いかかる。

「危ない！」

振り上げられた鉄からセレンを守るようにアルクが間に飛び込む。

「お兄ちゃん！」

痛みを覚悟し、強く目を閉じたアルクの耳にセレンの悲痛な叫びが聞こえた。

しかし、振り上げられた鉄は下ろされることなく、そのまま敵の後方へと吹き飛ばされる。

『え……?』

再び、二人の声が和する。

ゆっくりと目を開けたアルクが目にしたのは、アルクと敵の間に立ちふさがる人影だった。

「対象の敵対行動を確認。安全のため排除します」

腰まで伸びた蒼い髪が、緩やかに風を流す。

肘、膝より先はまるでそこから先を機械に取り替えたように白銀に輝き、右腕の甲からは蒼銀に輝くブレードが伸びている。

「おん……な？」

「な……に？」

驚くまま、アルクとセレンが声を出すとその人影が振り返った。それと同時に右腕から伸びたブレードが消える。

「MMHW-00X、個体名称 FION、機動完了しました」

美しく整えられた表情を一切崩すことなく、女性が言い放つ。胴体部分には最低限を覆うような伸縮性の布が取り付けられ、スレンダーなスタイルがよく分かる。

「マスター、お名前を」

呆気にとられたままの二人に、ふとすれば聞き逃してしまいそうなほど無感情な声で女性が声をかける。

「あ……アルク・イロナカートです」

「セレン・イロナカートです……」

あまりの事態に、求められるがままに名を名乗る二人。

すると女性がその前に膝を折り、恭しく頭を垂れる。

「アルク様、セレン様。何なりと御命令を」

長身の女性が膝を折ることによって、彼女の後ろに隠れていたそれが、二人の目に入る。

右の鋏を切り落とされた敵が、残る左の鋏を振り上げていた。

『危ない！』

しかし二人の叫ぶ声が女性の耳に届く前に、鋏が振り落とされる。

地響きを伴う衝撃が部屋全体を揺らす。

「尚も敵対行動を確認。個体維持及び安全確保の為、対象を完全に破壊します」

振り落とされた鋏の真横に女性が立っていた。

敵に背を向け、アルクたちの方を向いたまま。

さも外れることが分かっていたかのように平然と立っていた。

しかし、その位置が違う。

「あれを、避けた……？」

瞬きするほどの間に最低限の移動のみで敵の攻撃を避けたのだ。

「マスター、御忠告感謝します」

敵へ振り向くと同時に、再び右腕の甲から蒼銀のブレードが伸びる。

そしてそのまま、長い髪をなびかせながら優雅にターンをした。

少なくとも、アルクとセレンにはそうにしか見えなかった。

「対象の撃破を確認。システム通常モードへ移行します」

一回転し女性が言う。

次の瞬間、上下に切り分けられた敵がその場に倒れた。

鋭い切り口からは閃光が飛び散り、『ついでに』切り裂かれた六本の足が音を立て崩れ落ちる。

「……」

「……助かったの？」

セレンの小さな声に女性が反応する。

「敵対反応は消滅しました。ご安心ください」

その場にへたり込むアルクとセレンに再び女性が膝を折り頭を垂れる。

「マスター、御命令を」

「……と、とりあえず、あなたは誰ですか？」

震える情けない声でアルクが初めの質問をした。

「私は独立行動型戦闘魔導機人、型番 MMHW-00X、個体名称 FION です」

崩れ落ちた敵から離れ、起動時の言葉を繰り返すように女性が自己紹介をする。

「ふい……おん？」

名を呼ぶセレンの側に屈み、散らばった道具から包帯を取り出す。

「はい。そう御呼びいただいて結構です。応急治療を行います」

「あ、ありがとうございます」

無駄のない慣れた手つきでセレンの足首に包帯を当てる。その様子を眺めながら、次はアルクが質問をする。

「魔導機人って何ですか？」

「そのままの意味となります。魔力によって行動する戦闘用機械となります。御命令とあれば牽制攻撃から自爆攻撃までを利用し、確実に敵を排除します」

セレンの足に包帯を巻きながら物騒なことを言うフィオン。

「いや……自爆って」

「で、マスターって何ですか？ さっき俺らのことをそう呼んでるみたいですし」

「はい。機動時に御二方をマスター登録しました。以後私はマスターの下に属し、あらゆる命令を完璧に遂行します」

「……お兄ちゃん？」

事態が把握できないといった様子のセレンが困ったようにアルクの方を見る。しかし、アルクにも事態は把握しきれていなかった。

何となく、自分達が巻き込まれたことを感じ、呟く。

「……なんてこったい」

そんなアルク達の様子を気にすることなく、フィオンの処置は素早く進んでいく。

「応急手当を完了しました。薬品類の不足のため最低限度の手当となったことを御許してください」

「いや、そんな……十分ですよ」

セレンの足には完璧な均整がとれた包帯が巻かれている。

「すごいなあ」

一步下がって立ち上がった後、まっすぐにアルクの瞳をみてフィオンが話し出す。

「戦場におけるあらゆる事態を想定し、レベル 5 までの ER 技術、その他薬品に関する情報が登録されています」

「す、すごいですね」

澄み切った視線に突き刺され、アルクが僅かにたじろぐ。

そんなアルクの様子を無視し、フィオンは視線をずらさず言葉を発する。

「マスター、次の御命令を」

「いや、命令とかじゃなくてお願いなんですけど、ここはいったい何なんですか？」

しどろもどろになりながら、何とか質問をする。

アルクの場持たせの質問に、フィオンはすぐさま答えた。

「はい。ここは今より 1500 年前に建造されたアヴェンツ帝国第一魔導工廠、アルカディアの最奥部、永年シーリングルームとなります」

「……………1500 年前？」

「……………アヴェンツ帝国？」

アルクはさりとでてきた時間に驚き、セレンは国の名前に驚いた。

「え？ フィオンさんって 1500 年前に作られました？」

実感すら沸かない時間の話をされ、アルクが質問をする。

「どうぞ御呼び捨て下さい。私が作られたのは 1480 年前になります」

「……ずっと、生きていたの？」

包帯の巻かれた部分を手で押さえながらセレンがさらに質問をする。

「いえ、機動は本日が初となります。それまでハイバネーションモードにて待機しておりました」

「千年以上もずっと……！」

「御待ちしておりました。アルク様、セレン様」

そういって、フィオンは再び膝を折り頭を垂れる。

「シーリング処理後幾年、マスターが御呼びになる日を御待ちしておりました。御二方の為、この身尽きるまで御慕い申し上げます」

生み出されて千数百年、ようやく巡り会う二人の主。

遙かな時間を超えた出会いに、しばし言葉を無くす。

「……………」

「フィオンさん……」

何を言おうとしたかは分からない。しかし何か言わなければならないような気がしてセレンが口を開く。

しかしその後の言葉はアルクの言葉に遮られた。

「よかったです。助けてください」

「え？」

足首を挫いたセレンをアルクが背負い、駆け抜けた通路を戻っていく。

「お兄ちゃん。もう歩けるって……」

「いやだめだ」

不満の声を上げるセレンを一蹴する。

「アルク様、御命令とあれば私が……」

「いや、いいですよフィオンさん。セレンは俺が背負って行きます」

「畏まりました」

三人分の足音をたてながら機械兵器の猛進によって傷まみれになった通路を戻っていく。

明かりは既に絶えていたが、フィオンの周りの通路だけが再び青白く光った。

「で、どうやって外に出ればいいのか？」

照らし出されるフィオンの横顔を眺めながらアルクが尋ねる。人工の明かりに照らされたフィオンはさらに無機質に見えた。

「はい。御二方が落下された部屋を上ります」

首を動かす、まっすぐにアルクを見据えフィオンが答える。しかしその内容にセレンが疑問を投げかけた。

「え？ 上るって……」

その言葉と同時に部屋に到着する。

機械兵器が暴れたせいか、先ほどアルクたちが部屋を後にしたときよりも細かな破片が散らばっている。

「この部屋です」

上を見上げるフィオンの視線を追いかけるように、アルクとセレンも上を見上げる。

軽く五十メートルはあろうかという壁が三人の前に立ちふさがり、頂上付近で僅かに横から光が射し込んでいる。

こうして見上げるとかなりの高さを落下したことがよく分かる。

「……え？ これを上るの？」

「その通りです。セレン様」

「いや、ちょっと待って下さいよ。いくら何でもこれは……ロープもありませんし……」

「問題はありません。フィオンは如何なる状況にも完璧に対処します」

「は、はあ……」

自らの力を誇示するような発言とは反対に、フィオンの表情は変わらない。視線を壁に移したかと思えば、高速で何かを呟き出す。

「材質及び許容負荷の計算を開始します。推定質量及び衝撃量を計算、最安全ルートを構築……完了しました」

『ん？』

突然のフィオンの変化に声を上げるアルクとセレン。

そんな二人に振り返り、変わらない調子でフィオンが言い出す。

「上階までの移動ルートを確定しました。御一人様ずつとなりますが、安全に移動可能です」

「ど、どうやって……？」

不安げに尋ねるセレンに近寄り、フィオンが腕を伸ばす。

「セレン様、こちらへ」

アルクの背中から事態を把握できないといった様子のセレンを抱きとる。

そのまま両腕で抱き抱え、いわゆるお姫様抱っここの形となった。

「ふえ？」

「セレン様、御掴まり下さい」

言うや否や、凄まじい跳躍力で床を蹴り、崩れた瓦礫に跳び移る。さらに勢いを殺すことなく、そのまま次の足場へと跳び移った。

「すげえ……」

裕に十メートルはあろうかという大ジャンプにアルクの口から感嘆の声が漏れる。

それに僅かに遅れてセレンの絶叫が聞こえてきた。

「ひいいいやあああああ……」

セレンの声が響く間にもフィオンは壁を跳び上り続け、見る間に上階、アルクたちが落ちてきた層へとたどり着く。

その後セレンを下ろしたフィオンが、再び絶壁を駆け降りてくる。

「お待たせしました、アルク様」

「……」

「さあ、セレン様が御待ちです」

「は、はい。お願いします……」

「それでは。失礼します」

先ほどのセレンと同じようにアルクもフィオンに抱き抱えられる。

(お姫様抱っこって……仕方ないとはいえ、余りに情けないなあ……)

「衝撃があります。ご注意ください」

腕の力が加わり、フィオンの体にアルクが押しつけられる。

金属質な腕とは異なり、胴体部分の柔らかさは人間のそれと同じだ。

(すげえ……なんだかスゴい柔らか)

「行きます」

「うおおおおっ！」

フィオンの跳躍力にアルクの意識が置いて行かれそうになる。

無意識の内に口からこぼれる声を置き去りにしながら、高速で天井へと迫る。

「せ、せせせ……せ、セレン……」

「お、おおお……お、お兄ちゃん……」

間違いなく今日一番の衝撃体験に、震える声で互いの安否を確認する。

互いの肩を掴み震え合う二人を見つめていたフィオンから警告が上がる。

「生体センサーに反応があります。熱紋照合、データベース照合、レベル 1 魔力反応感知、『ウルフ』と思われるます」

階段の方を振り返ると、先の戦いの際に逃げ出した三匹のウルフがこちらの様子をうかがっている。

毛を逆立て、牙を剥きだし威嚇をしているも、機械兵器との死戦をくぐり抜けたアルクとセレンには迫力不足だ。

「御二方、どうされますか？ 円滑な脱出のために撃破を推奨します。御命令があれば即時対処が可能です」

「まあ、そうだよなあ」

機械兵器を切り裂くほどの武器と運動能力を持っていれば、ウルフ程度の敵はまさに害獣以下だ。

「じゃあ、私がやるね」

仲間の余裕を感じ取り、言葉と共にセレンが杖を掴み立ち上がった。

「実は、さっきの戦いで閃いたんだ」

「新技？ ていうか魔法？」

「そう。名付けて『ハンマー・ブレイク』！」

言葉と共に杖を前方へ突き出す。

すると三匹のウルフの頭上を覆うように白く光る魔法陣が出現した。

「たああっ!!」

杖を上から下へと振り下げるのと同時に、魔法陣も地面へと叩きつけられた。

ウルフの小さな鳴き声と魔力が地面に叩きつけられる音が響く。

低い衝撃音の後、光をまき散らしながら魔法陣が消滅していく。

「ま、こんなもんでしょ」

腕を組み、したり顔のセレンの前には、三匹のウルフが倒れていた。

「お、おおお」

初回とは違い十分に余力を残した勝利に、アルクが感嘆の声を上げる。

「お見事です。セレン様」

「そこまで誉めなくても……そういえば、お兄ちゃんもなんか新しいことが出来るようになったんでしょ？」

「え？ ああ。そうだ」

返事をしながらポケットから二丁の銃を出す。

改めてそれを見つめながら軽くため息をついた。

そんなアルクにセレンが声をかける。

「どうしたの？ なんか悪いことがあった？」

「いや、何て言うかさあ。収まりが悪いなって」

腰に備えたホルスターは一丁用。増えた銃を仕舞うことは出来ない。

「いくら魔力弾しか撃てないからって、流石にポケットに突っ込みっぱなしってのはなあ……」

安全装置は掛けてある上に、魔力弾は持ち主の意志によって発射されるとはいえ不安が残る。

「もっかい一丁に戻らないかな……」

覇気なく呟いた途端に銃が僅かに光る。

「うおっ!？」

フラッシュを焚いたかのように一度光ると、両手に持った銃のうち、左手に持ったものが消滅した。

「おお!？」

驚きの声を上げながら再び銃を確認する。

消えていた弾倉が再び現れ、初めに持っていたものに戻っている。

その様子を見つめていたフィオンがおもむろに口を開く。

「その銃はクリエイションシステムが搭載されたタクティカルデバイスと予想されます」

「……何システムって？」

聞きなれない言葉にアルクが疑問の声を上げた。

「クリエイションシステムです。必要に応じ形状、質量、役割を変更し、様々な状況に柔軟に対応出来る機構です」

「そんな凄いものだったの？」

セレンがそう言いながら、アルクの手元の銃を覗き込む。

見慣れた形に戻ったそれは、細かな傷まで完璧に元通りになっている。

「いや、父さんはそんなこと一言も言ってなかったんだけどなあ……」

まじまじと銃を見つめながらアルクが言葉をこぼす。

その間にもフィオンの説明は進んでいく。

「クリエイションシステムはアヴェンツ帝国が大戦末期に開発したシステムです。流通量は極僅かと予想されます」

「そんなレア物だったんだ……」

「この銃を大切にしなきゃならない理由が増えたな」

感慨深く呟きながら、慣れた手つきで銃をホルスターに仕舞う。

「御要望とあれば、システムについての詳細な説明が可能です」

「うーん、とりあえずそれは家に帰ってからでいいかな。っていうかフィオンさんはどうするんですか？」

家という言葉にアルクが思い立ったように質問をする。

「フィオンは何時如何なる場合でもマスターである御二方の御側に」

「つまり家に来るってこと？」

アルクの言葉に一つ頷き、フィオンが話し出す。

「御命令とあれば、あらゆる場所で待機可能です。風雨に晒される場所であっても何ら問題ありません」

「いや、問題あるよ……お兄ちゃん」

問題ないと言い切るフィオンにセレンが呆れ顔で応える。

そのまま何か言いたげにアルクの方を向いた。

「分かってるって。とりあえずフィオンさんには俺たちの家に来てもらおう。ちょっと狭いけど……ま、どうにかなるだろ」

その言葉を聞き、セレンの表情が明るくなった。

「はい。フィオンさん、それでいいですか？」

「はい。問題ありません」

土の匂いが立ちこめる洞窟に戻っていく。

足元が不安定な洞窟からは、フィオンの提案でフィオンがセレンを背負うこととなった。協力することによって行きよりも速く洞窟の入り口まで戻ることが出来た。

ようやく洞窟の出口から顔を出すと、やや朱色を増してはいるものの、そこには青空が広がっている。

「おお、久しぶりの空な気がする」

「ほんとだね。私もそう思うよ」

「1480年、製造後初めてとなります」

昼前に行動を開始して、今は日が傾き掛けている。半日に満たない冒険だったが二人には何日もかかったような気がした。

「だいぶ日が傾いてきたなあ。夜までに家に帰るのはキツイかも」

「とりあえず村に戻ろうよ。村長さんと、ジェラルド君にも報告してあげなくちゃ」

「ああ、そうだな。フィオンさん、もうちょっとセレンをお願いします」

「お任せください、アルク様」

ウルフが残した獣道を辿りながら村へと戻っていく。

途中で何かがあるわけでもなく、山から吹き下ろされる心地よい風に吹かれながら進んでいく。

森を抜け、村に近づくと、門から小さな影が飛び出してきた。

「アルクさん！ セレンさん！」

満面の笑みで出迎えるジェラルドにつられて、アルクとセレンも笑みを返す。

「ええっと、もう一人いましたっけ？」

四肢が金属、服装は最低限隠す程度という格好のフィオンを見てジェラルドが声を上げる。

「んー、まあ何て言うか……」

アルクが説明に困っていると、フィオンがジェラルドの瞳を真っ直ぐに見つめながら口を開いた。

「アルク様とセレン様の従者、フィオンと申します」

「え？」

把握できない様子のジェラルドに、セレンが補足で説明をする。

「途中で仲間になってもらったの。悪い人とかじゃないから安心して」

その説明に納得したのか、ジェラルドの顔に笑みが戻る。

「分かりました！ ってセレンさん、その怪我は？」

「えへへ、ちょっと挫いちゃってね……あ」

「どうされましたか、セレン様」

ジェラルドとの会話によりセレンはあることを思い出した。フィオンに背負われたまま魔力を集中させる。

『『エナジー・ヒール』』

言葉と共に淡い暖色の光がセレンの足を包む。

「あ、フィオンさん。降ろしてもらえますか？」

「はい」

地面に降り立ったセレンの表情に痛みの色はない。

「そっか……言ってたよな。回復魔法は得意だって」

「うん……今まで忘れてた……」

二人の間に沈黙が流れる。いかに事態が急展開の連続であったとしても、怪我を治す、治せることを忘れるのは一歩間違えれば致命的だ。

気まずい沈黙を破ったのは、何かを思いついた様子アルクだった。

「あ、そうだ。だったらジェラルドの妹もそれで治してやれるんじゃないか？ 確かウルフに怪我させられたん

だろ？」

「そだね。ウルフに付けられた傷がそこまで深くないなら、多分大丈夫だと思う」
突然の提案にジェラルドは困惑する。

「え？ いいんですか!？」

「うん。大丈夫だよ。お家まで連れて行ってくれるかな？」

笑顔で応えるセレンにジェラルドは歓喜した。

「はい！ こっちです！」

飛び跳ねんばかりの足取りのジェラルドに案内され、三人は村の門をくぐった。

村に入り、少し進んだところでアルクはセレンたちと分かれる。

「じゃあ、セレン。しっかり治してやれ」

「あれ？ お兄ちゃんは？」

「先に村長さんに報告に行ってくるよ」

「アルク様、私はどちらに」

フィオンの言葉に少し悩んだ後、アルクが応える。

「セレンと一緒に行って下さい。説明するのもちよっとややこしすぎるので」

「了解しました」

「ただいま戻りました」

「おお、お戻りになられましたか」

扉を開けたアルクが目にしたのは、不安げな表情のまま椅子に座る村長の姿だった。

袋を取り出し、村長の前に進みながらアルクが説明を始める。

「多少の紆余曲折はありましたが無事にウルフを討伐することが出来ました。こちらが証拠品となります」

アルクが袋からウルフの牙を取り出す。

それを机の上に並べると説明を再開した。

「討伐したウルフは全部で 10 頭です。一応周辺にこれ以上は居ないことを確認しましたが、また何かあればギルドまでご一報下さい」

そこまで聞き終えた村長によりやく安堵の表情が戻った。

「真に有り難い。そういえばお連れさんはどうなさったのじゃ？」

「ジェラルドという村の子の家に向かっています。怪我をした彼の妹の治療を行っているでしょう」

「それは……申し訳ございませぬ。なにせ村には薬草ぐらいしか有りませんで……お代の方はいかほどに……」

申し訳なさそうに言葉を発する村長に、慌ててアルクが反応する。

「いえ、こちらが好きでやってることなので……」

「いやしかし……」

しかし村長は尚も引き留める。

本来、魔法による治療はそれだけで依頼が成立するほどのものだ。

いくら自分たちが言い出したことではないとはいえ、無償では心苦しいのだろう。

そう思ったアルクはある提案をした。

「あ、じゃあ少し頂きたい物があるんですが……」

「はあ……」

「じゃあちょっと傷口を見せてもらおうね」

「う、うん……」

少女の足に巻かれた包帯を解くと、緑に腫れ膿んだ傷口が見えた。

「う、ううう……」

痛みよりもその外見の酷さに、少女が目を背ける。

今にも涙をこぼしそうな少女の頬をセレンがそっと撫でた。

「大丈夫だよ。すぐにお姉ちゃんが治してあげるから」

「うん……」

「セレン様、何なりと御命令を」

セレンの後ろに控えたフィオンが声をかける。

少女の頬を撫でながらセレンが頼む。

「あ、じゃあ。温かいお湯とタオルを用意してくれますか？」

「了解しました。ジェラルド殿、道具の所在を説明していただけますか」

「え？ あっ、はい！ こっちです！」

ジェラルドとフィオンが用意をしているのを横目に、セレンが少女へと向き直る。

「それじゃあ行くよ。大丈夫、痛くないからね」

「……うん」

『キュア・ヴェノム』

セレンが杖をかざし唱えると、柔らかな光が少女の傷口を包む。

「うう……」

光に目を閉じた少女が次に見たものは、毒々しい緑色が無くなり、傍目にはただの大きな切り傷となった傷口だった。

「すごい……きれいになってる……」

「うん。それじゃあ、もうちょっと。次は傷自体を治していくね」

「うん！」

すっかり治療への恐怖心が無くなった少女は元気な声で返事をした。

『エナジー・ヒール』

セレンが再び唱えると、光に包まれた少女の白い足から傷が消えていく。

「はい！ これで完璧っつと」

光が消える頃には少女の足は元通りになっていた。

「すごいすごい！ もういたくないよ！」

「よかったな、セラ！」

喜ぶ少女、セラにジェラルドも満面の笑顔で応えた。

「うん！ おねえちゃんたち、ありがとう！」

「いえいえ、どういたしまして」

子供たちの感謝の声に応えながらセレンが濡れタオルで少女の足を拭いていく。

「一応治ったとは思いますが、しばらくは無茶しちゃ駄目だからね？」

「本当にありがとうございます！」

「ありがとう！」

恐る恐る少女が足をつき、部屋の中をゆっくりと歩き出す。そのとき、家の扉が開いた。

「えーと、ここか？」

「あ、お兄ちゃん」

「おう、セレン。妹さんは……治ったみたいだな」

「うん。お兄ちゃんも報告終わり？」

「ああ。済ませてきた」

部屋の中に入るアルクに、フィオンがすかさず歩み寄る。

「アルク様、御荷物を御持ちします」

「ありがと……っていうか、これはフィオンさんへのプレゼントです」

アルクが手に持った大きな袋をフィオンへと手渡す。

それをしばらく見つめてからフィオンが反応した。

「……それは一体どの様な意味でしょうか」

「とりあえずそれ、開けてみてよ」

「……はい」

やや歯切れの悪い返事とともに袋を机に置き、封を開けた。

フィオンが包みを開けると、一式の服装が表れる。

「これは……」

「フィオンさんの服です。村長さんに頼んで村の店から貰ってきました」

袋の中身は、肘まで隠す長く薄い白手袋、膝の高さまである皮のブーツ、そして黒を基調にし、袖や裾を目立たない程度に白いフリルで飾り付けたワンピースだ。

「流石にその格好はどうかと思って……どうです？」

「これを……私に？」

「あ、俺が勝手に選んだものだから……気に入らなかったら王都で買い換えて貰って構いませんし……とりあえず……」

しばらくじっと服を見つめていたフィオンが、唐突にそれを着込みだした。

素早い手つきで各所の紐を結び、最後に後頭部に手を伸ばし、襟から長い髪を勢いよく出す。

決して華美でない装飾がフィオンの美しさを一層引き立たせ、そこには貴婦人のような気品と美しさがあった。

「……いかかでしょうか」

「……いや、俺はファッションとかよく分からないけど……凄く似合っていると思います。な？ セレン？」

「え？ う、うん。見とれちゃうくらいです」

「……ありがとうございます」

場にそぐわない程の美しさに、アルクとセレンがたじろぐ。

そこにフィオンを見ていたセラが素直な感想を述べた。

「すごーい！ おひめさまみたい！」

「セラ様、御褒め頂きありがとうございます」

裾を少し持ち上げ、脚を折り頭を垂れる姿はとても様になっていた。

「じゃあそろそろ行くか」

袋を片付けたアルクが声を上げる。

「え？ もう帰るんですか？ せめて今日くらいは……」

ジェラルドが引き留める様にするも、アルクは頬を搔きながら言う。

「いや、路銀もないし、三人なら多少は暗くても大丈夫だから」

「そんな……そうだ！ ここに泊まっていてくださいよ！」

「え？ ここにか？」

突然の提案にアルクが驚く。

それに見てジェラルドは話を続ける。

「はい！ 父も母も行商に出ますから部屋は空いていますし」

「うーん。どうする、セレン？」

「おねえちゃんといっしょにいる！」

「ってさっきから離れてくれないんだけど……」

アルクが見ると、そこには椅子に座ったセレンと、セレンの膝の上に収まったセラの姿があった。

セラはセレンの服を小さな手で握っており、簡単には帰してくれなさそうだ。

「……フィオンさんは？」

「御二方の居られる場所が、フィオンが居るべき場所です」

フィオンに聞くと、さも当然といった答えが返ってきた。

「ん……よし！ じゃあ今晚はお世話になりますか！」

「どうぞ！」

慎ましくも楽しい夕食を終え、一夜限りの賑やかな夜を過ごした翌日。昇る朝日が眩しく照らす頃に三人は村を後にした。

「昨日は楽しかったね」

「そうだな。あの二人もしばらく親が帰ってこなかったから、少し寂しかったのかもな」

別れ際のジェラルドとセラの表情を思い出しながらアルクが呟く。

ジェラルドは精いっぱい笑顔で送り出してくれたものの、セラは今にも泣きだしそうな表情だった。

「……そだね」

少し沈んだ様子のセレンを気にして、あえて声を張ってアルクが言う。

「ま、もうすぐ両親も帰ってくるって言ってたし。そこは心配ないか！」

「うん！」

あの二人と違い、アルクとセレンの元にはいくら待っても両親は帰ってこない。

直接目にしたわけではないが、もう会えないことを二人は知っている。

「それよりもだ」

いままで家族の話題は暗くなりがちなものが多かった。

しかし、今日は違う。

二人の元へとやってきた、新たな家族がいる。

「……如何なさいましたか」

「いやあ、家族が一人増えたなって」

「フィオンは魔導機人です。案じられずとも捨て置き下さって構いません」

「いやだから構うって！」

少しずれたフィオンの答えにアルクは大声を出しながらも、笑顔だった。

「ベッドとか服とか、いろいろ必要だね」

そして、セレンもまた、明るい表情だ。

「ま、その辺はまた頑張ってくださいますか！」

アルクの元気な声が青空の下に響く。

行きとは違い、一つ増えた三つの影が城壁に囲まれた王都へと向かう。

新たな家族、新たな出会い、新たな力。

小さな冒険の小さな変化、しかしこれはいつか世界をも巻き込む変化のきっかけになる。

……かもしれない。